ローマ人への手紙　第 12 章　15 節

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」

過日おなじみことばを聴いた。聴きながら薔薇の木のことを観察し想ったことを記した。その後に、また知らされたことがある。そのことを今日は辿ってみたい。おなじみことばでもう一度聴きたいと促されたのは、いっしょに、の言葉である。いっしょに喜び、いっしょに泣く。喜び、泣くどちらにもついている、いっしょに、である。各自が独立した者だから、いっしょに、と表現できる。互いがべったりとなっていたらいっしょに、の言葉は無いであろう。互いが自立した者として、喜び、泣くからいっしょに、が起こる。

ベランダの薔薇の蕾はそれぞれ独立して枝さきについている。各自の成長過程は姿形、スピード、色合いからして様々である。それでいて、寒空の下、忍耐しひたすら開花の時を待つ。陽ざしの喜び、氷雨の厳しさを耐え忍ぶのもいっしょに、である。このいっしょを支えるひとつの根が地中に張られている。

ローマ教会には喜びがあり、また泣くこともあった。喜びと涙が同時にあった。喜びを素通りすることなく、また、涙を回避するのでもなく、それらすべてを、いっしょに分かち合いなさい。教会の根がわかるから。

2021 年 12 月 16 日